

西洋視点で見た Haku Rakuten ——英訳能「白楽天」を通して——

北京外国語大学・日本学研究センター 李知雨

能楽研究所の創立者たる野上豊一郎は、評論『能の再生』(1935)の序で、「新しい目を以て見、新しい頭を以て考へるのでなければ、能の最も本質的なものは捉めない。一種の言ひ方をして言ふならば、能の本統に芸術的な研究は、われわれが外国人の目を以て見直し、外国人の頭を以て考へ直すところから始まらねばならぬ」と述べており、異域の目を以て能楽という日本伝統の、高度に洗練された古典芸能を改めて捉える重要性を唱えた。即ち、外国人の能楽研究を読み、外国語に訳された謡曲を鑑賞することである。

そこで、数多なる謡曲から、本稿が研究対象として焦点を当てたのは、脇能・白楽天である。その理由は二つ。まず、白居易が日本文学に与えた影響の大きさはもはや自明であり、『白氏文集』から材を仰いでた『源氏物語』を代表とする平安文学から取材し、数多くの白詩を取り入れた『和漢朗詠集』を以て情を醸し出した室町時代の能楽も、当然例外ではない。そして、白居易をワキとして扱った「白楽天」は、中国人と日本人が対面する数少ないの謡曲であり（中国物と言われる「楊貴妃」「邯鄲」ら謡曲の登場人物は設定上全員中国人である）、それ時点で日本側の古代中国に対する態度（第一層の異域の目）を表しており、その上で Authur Waley、Carl Sesar らの翻訳・研究から西洋視点での「Haku Rakuten」像を捉えることができる（第二層の異域の目）。もっとも、本稿を作成するプロセス上、中国人である筆者の視点そのものが、第三層の異域の目になり得る故、そんな視点の重層こそが、本研究の醍醐味と思う。

研究方法として、本稿は主に Authur Waley、Carl Sesar、Susan Klein らの翻訳テキスト・研究に基づいて、ジャポニズムの時代から現代までの Haku Rakuten 像を探り、白居易と住吉明神との対決の裏にある中国・日本の複雑な関係性を西洋視点で捉えたいと思う。